「資　料」

第8回IWA役員会及び第4回IWAマラケシュ世界会議・展示会等に出席して

竹　中　勝　信
日本水道協会研修国際部国際課長

1.　はじめに

第4回国際水協会（IWA）世界会議・展示会が、平成16年9月19日（日）から同24日（金）まで、北アフリカの「モロッコの楽園」といわれ、歌手、松田聖子さんの同名の歌ですっかり名前が知られるオアシスの街、マラケシュ市にある国際会議場・展示場（パレス・デス・コングレス）で盛大に開催された。

出席者はアルジェリア、オーストラリア、オーストリア、バングラデシュ、ベルギー、ベナン、ブラジル、ブルガリア、ブルキナファソ、カメルーン、カナダ、チリ、中国、コロンビア、コンゴ、キプロス、チェコ、デンマーク、エジプト、エクアドル、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ガーナ、ギリシャ、ギニア、ハンガリー、香港、インド、インドネシア、イラン、アイルランド、イスラエル、イタリア、コートジボワール、ヨルダン、ケニア、クウェート、レバノン、リビア、リトアニア、ルクセンブルグ、マラウイ、マレーシア、モーリシャス、モーリタニア、マヨット、メキシコ、モザンビーク、オランダ、ニカラグア、ナイジェリア、北朝鮮、ノルウェー、オマーン、パキスタン、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、ロシア、サウジアラビア、セネガル、セルビア・モンテネグロ、シンガポール、スロバキア、スロベニア、南アフリカ、スペイン、スリランカ、スワジランド、スウェーデン、スイス、台湾、タンザニア、タイ、トーゴ、チュニジア、トルコ、アラブ首長国連邦、英国、アメリカ合衆国、日本、モロッコ、ザイール、ザンビアの世界87ヵ国・地域から総勢2,200名（事務局発表）が参集した。そのうちモロッコ（300名参加）以外の国・地域の人は1,900名で、日本人は154名が参加、海外参加国・地域の中で一番の人数であった。また、これと併行して30のワークショップ、が9月19日（日）から9月24日（金）にかけて、また水道事業管理者（CEO）フォーラムが前回のメルボルン世界会議に引き続いて、9月20日（月）午後から翌21日（火）午後1時過ぎまで開かれ、さらに9月22日（水）午後12時30分からASPIRE評議会がシンガポールのChan・PUB水道局長の司会・進行で開催された。

また、世界会議に先立って第8回IWA役員会議（会長会議、理事会、戦略評議会、プログラム委員会）が国際会議場2階のフェス1ミーティングルームなどで開催され、丹保放送大学長（IWA前会長）、赤川日本水道協会専務理事（IWA理事）、大垣東京大学大学院教授（IWA理事／戦略評議会委員）、渡辺北海道大学大学院教授（IWAプログラム委員会委員）、松井庸司東京都水道局多摩水道改革推進本部調整部長（IWA戦略評議会委員）、さらに今回IWA副会長選挙に立候補された松井三郎京都大学大学院教授がそれぞれの役員会議に出席された。

表-1　IWA世界会議の開催国、開催都市及び登録者数

回	年	開催国	開催都市	登録者数
第1回	2000	フランス	パリ	3,000（155）
第2回	2001	ドイツ	ベルリン	2,700（196）
第3回	2002	オーストラリア	メルボルン	1,792（155）
第4回	2004	モロッコ	マラケシュ	2,200（154）

注）括弧内の数字は、日本人の会議登録者数

2. 第4回IWAマラケシュ世界会議・展示会の概要

1) 世界会議開催準備のための各種委員会等

第4回IWAマラケシュ世界会議・展示会開催準備のために設置された委員会は、「コングレス・コーディネーティング委員会（Congress Coordinating Committee）」、「ジョイント組織委員会（Joint Organising Committee）」、「プログラム委員会」で、これまでは開催国主導で委員会のメンバーが構成されていたが、今回はIWAロンドンオフィスも絡んだ委員会のメンバー構成となった。

また、これ以外にも、世界各国・地域から提出された1,500以上の口頭発表論文・ポスター発表論文の内容を審査するレフェリーに世界中のIWA会員の中からボランティアで総勢257名の応募があり、そのうち日本からのレフェリー参加は17名であった。参考までに各委員会のメンバーを以下に記述する。

コングレス・コーディネーティング委員会

Ali Fassi Fihri	会議会長
Abdellaziz Taariji	会議副会長
Michael Rouse	IWA会長
Paul Reiter	IWA専務理事
Ahmed Hajji	モロッコ技術委員会
Mounir Zouggari	会議財務官（Congress Treasurer）
Jerry Gilbert	プログラム委員会議長
Alain Lasalmonie	会議アドバイザー

ジョイント組織委員会

Abdellaziz Taariji	会議副会長
Mounir Zouggari	会議財務官
Alain Lasalmonie	会議アドバイザー
Mark Pascoe	IWA副専務理事

プログラム委員会

Jerry Gilbert	プログラム委員会議長
Francisco Cubillo	スペイン
Rhodes Trussel	アメリカ合衆国
Harro Bode	ドイツ
渡辺 義公	日本（北海道大学大学院教授）
Willie Grabow	南アフリカ
John Batten	アメリカ合衆国
Ahmed Hajji	モロッコ
Helmut Kroiss	オーストリア
Gerard Luyet	スイス
Simon Gonzalez	メキシコ
Jacques Labre	フランス
In Kim	韓国
Jining Chen	中国

なお、今回の世界会議のスポンサーは、モロッコ内務省、1997年に発足したモロッコ水道・環境衛生協会（AMPPA）、1972年に発足した維持管理を主体とした国営飲料水・環境衛生公社、1997年に発足したスエズ系のモロッコ上下水道・電気公社、ヴェオリア・エンバイロメント・モロッコ株式会社、ミネラル・ウォーターのSidi Ali社、モロッコ・ロイヤル航空、モロッコ銀行グループ、貿易発展イスラム・グループ、市中銀行グループである。

2) 会議登録費

世界会議の事前登録費は、平成16年6月30日まではIWA会員に対して600ユーロ（約84,000円）、非会員に対して700ユーロ（約98,000円）、学生会員に対して200ユーロ（約28,000円）であった。さらに、今回初めて低所得国・地域から参加する会員・学生会員については、事前登録費としてそれぞれ400ユーロ（約56,000円）、150ユーロ（約21,000円）に設定されていた。また、同伴者に対しては200ユーロ（約28,000円）であった。

なお、事前登録以後、当日登録を含めてIWA会員、非会員、学生及び低所得国からの参加者に対しては事前登録費に比べて50ユーロ（約7,000円）高く設定されていた。

3) 開会式

第4回世界会議は、マラケシュの新市街地の一角にある国際会議場を舞台にして開催され、開会式は9月20日（月）国際会議場のMinistresホールで行われた。

まず、IWA専務理事のPaul Reiter氏が舞台に現われ自己紹介した後、司会・進行役を務め、Mohamed El Yazghi国土整備・都市計画・住宅・環境大臣が「モロッコは国王が水に関心を持っており、水問題は国の重要な政策課題の一つとなっている。これまで社会資本整備に多くの投資をし、

水事情も良くなりライフスタイルも変わってきた。しかし、アフリカの3分の2の人々は、未だ水道と環境衛生の立ち後れた環境で日常生活しているため水系伝染病にも見舞われている。この水系伝染病の解消と貧困の問題が最重要課題の一つである。さらに、降雨の少ないモロッコ王国では水資源開発ももう一つの最重要課題である。モロッコの都市部では100％水道が普及しているが、農村部ではまだ普及率は低いのでこれを何とかしなければならない。2007年度を中期目標として90％の水道整備を目指して現在進行している。そして、現在、民間企業の力も借りて地方分権化も進めている。国の経済発展には技術が必要で、今後ともIWAのネットワークを利用して経済発展させていきたい」と祝辞を述べられた。

続いて、Omar El Jazouli マラケシュ市長が地元を代表してマラケシュの歴史や水事情を紹介して、国際会議参加者に歓迎の意を表された。

それから Michael Rouse IWA 会長から、今回の世界会議の内容と様々なイベントを紹介しつつ、開催国以外からの参加者が過去の世界会議よりも最多になったことを強調された。

次に Ali Fassi Fihri 会議会長が舞台に上がり、「カサブランカは水道の民営化を進め、若い技術者を育ててきたので水事情は良くなっている。今後もモロッコ水協会と IWA との一層の協力関係を作り発展させたい。」と述べられた。Ali Fassi Fihri 会議会長の挨拶に続いて、ステージの大画面にはモロッコの水の歴史と水技術の発展をスケッチしたビデオ映像が流され、民族衣裳をまとったダンサーが舞台に登場、華麗な踊りを披露した。

その後、表彰式が行われ、IWA 大賞としてゴールド・メダルが世界保健機構（WHO）の Jamie Bartram 博士に授与された。Jamie Bartram 博士より受賞の喜びのスピーチがあり、「皆さん、このような賞を与えていただきまして本当にありがとうございます」と受賞の喜びと同時に、「WHO が調査した水系伝染病の死亡者数と今回の世界会議で WHO が開催するワークショップへの参加、今後とも公衆衛生の貢献をしていきたい」と述べ、会場から大きな拍手喝采を受けた。

35歳以下の研究者・技術者に送られるヤング・プロフェッショナル賞（別名 Maarten Schalekamp 賞）にはドイツの T. Merkel 博士が表彰され、1,000ポンド（約22万円）の表彰金が贈呈された。さらに個人会員・法人会員・協会職員の中で IWA 事業に功績のあった者に送られる功労賞（別名 Samuel H. Jenkins 賞）に John Tyson 氏、出版賞に Peter Wilderer 博士がそれぞれ Michael Rouse 会長から表彰された。

水道事業体を対象とした PR 賞の授賞式には IWA マーケティング＆コミュニケーション・グループの議長である Brita Forssoerg 女史とオーストリアの Walter Cling 氏が舞台に呼ばれ、Cling 氏が PR 賞の各分野の優秀者を呼び上げ、Forssoerg 議長が優秀者に記念品を贈呈した。Best Presentation of Water Science 賞にはスウェーデン Kemira Kemi AB の Kemwater、Best Promoted Water Protection Activity or Programme 賞にはスウェーデンの Stockholm Vatten、レポート賞はオランダの WML、Limburg、SchoolInformation Programme 賞にはオランダ WML、Limbutg、水道料金徴収賞には香港水務署、Customer Services Activities 賞にはスペインの Emassagra、Granada、最後に全分野から最優秀賞には、オランダの WML、Limburg が表彰された。

基調講演では1996年の IWSA ダーバン世界会議でも基調講演された John Briscoe シニア水アドバイザーが、「水と公衆衛生による発展途上国の発展と貧困層の減少：世界銀行からの展望」について講演された。講演の中で John Briscoe 氏は開発途上国への投資のタイプを①広域型、②貧困層へのインフラ整備型、③広域でのサービスのみ、④貧困層への教育や人材などのソフト充実型に分類して「知を持って水を考えよう。水資源が中心の問題である。国際水資源協会など水関係の国際機関と今後連携をしていきたい」と結び、開会式が終了した。

開会式では丹保前会長は着席の最前列で、Omal El Jazouli マラケシュ市長、Mohamed El Yazghi 国土整備・都市開発・住宅・環境大臣、Paul Reiter 専務理事、Ali Fassi Fihri 会議会長、David Garman シニア副会長、Laszlo Somlyody 次期会長、Michael Rouse 会長夫妻ともども腰掛け

られ、盛大に拍手を送っておられた。

4） 展示会

開会式が終わると展示会のオープニングセレモニーがあった。展示会には、世界の水関係企業、国際機関、各国の水協会、コンサルタント、NGO、研究機関など全部で100社が83ブースで出展した。フランスのスエズ・エンバイロンメントをはじめ、ドイツのRWE・テムズ・ウォーター社、アメリカ合衆国のアメリカン・ウォーターなどの大手企業も出展していた。日本からは大成機工株式会社1社のみの出展であった。出展の多かった企業などは地元モロッコの19社、続いてフランスとオランダの13社、ドイツの8社、英国の7社、アメリカ合衆国の6社、デンマークの5社であった。

5） 口頭発表／ポスター発表／ワークショップ等

9月20日（月）の午後12時30分からはランチョン・セッション、引き続いて午後2時からは科学技術プログラムに入り、12会場に分かれて口頭発表が繰り広げられた。

9月21日（火）は17会場、9月22日（水）は20会場、9月23日（木）は15会場、そして最終日の9月24日（金）は3会場でそれぞれ口頭発表が行われた。

なお、口頭発表は通常の分科会以外に30のワークショップがあった。

口頭発表論文数は長い発表と短い発表あわせて全部で554題あったが、日本からの口頭発表は以下の54題であった。

○口頭論文発表（38編）（＊：発表者）

・仕切板挿入型MBRによる高度下水処理：既存MBRの簡易な改造による栄養塩除去の効率化
　＊木村　克輝（北海道大学）
　渡辺　義公（北海道大学）

・発泡ポリプロピレンを用いた上向流式沪過による路面排水の処理
　＊Byung-Cheol LEE（京都大学大学院）
　松井　三郎（京都大学大学院）
　清水　芳久（京都大学）
　松田　知成（京都大学大学院）
　田中　義人（㈱ホクコン）

・バイオレメディエーションに向けた高効率溶存水素供給装置の開発
　＊野畑　友哉（早稲田大学）
　Michal Prosnansky（早稲田大学）
　榊原　豊（早稲田大学）
　福田　章一（㈱ウェルシィ）

・三次元配置湖沼調査データの統合的解析手法の開発
　＊Suwanna Kitpati（京都大学大学院）
　藤井　滋穂（京都大学大学院）
　清水　芳久（京都大学大学院）

・凝集・沈澱による濁質処理の改善に関する革新的な技術
　＊海老江　邦雄（北見工業大学）
　川口　倫由（北見工業大学）
　浅野　優（北見工業大学）

・アルミニウム凝集剤と錯体形成する藻類由来有機物質の親和性分離
　＊高荒　智子（東北大学）
　佐野　大輔（東北大学）
　大村　達夫（東北大学）
　今野　弘（東北工業大学）

・多重電極システムを利用した生物膜電極反応槽による脱窒特性
　＊Dr. Michal Prosnansky（早稲田大学）
　渡邉　智秀（群馬大学）
　黒田　正和（群馬大学）

・ダイナミック沪過を用いた活性汚泥処理法
　＊田中　俊博（㈱荏原製作所）
　葛　甬生（㈱荏原製作所）

・東京湾湾奥部の浚渫窪地及び平場海域における水環境と底生微生物群集構造の動態変化
　＊Udin Hasanudin（豊橋技術科学大学）
　藤田　昌史（豊橋技術科学大学）
　鯉渕　幸生（東京大学）
　藤江　幸一（豊橋技術科学大学）

・配水管網における管路更新の適切な投資に関する研究
　＊朝倉　安佳（東京都立大学大学院）
　小泉　明（東京都立大学大学院）
　小棚木　修（東京都立大学大学院）
　渡辺　晴彦（㈱日水コン）

稲員とよの（東京都立大学大学院）

・下水道管きょの更新（再整備）と長寿命化マネジメント－横浜市の持続可能な下水道への試み－

＊奥野　修平（横浜市下水道局）

・超微粒度活性炭添加による吸着・膜分離ハイブリッドシステム

＊松井　佳彦（岐阜大学）
福田　剛隆（岐阜大学）
松下　　拓（岐阜大学）
青木　伸浩（日本碍子㈱）
美馬　　智（日本碍子㈱）

・浄水処理におけるAOP＋MF膜によるマンガン除去の評価

＊黄　　建元（前澤工業㈱）
滝　　崢（元埼玉大学）
Jing Wang（IWA本部）

・低圧膜沪過による外圧式MF膜目詰まり抑制の応用

＊黄　　建元（前澤工業㈱）
滝沢　　智（東京大学）
藤田　賢二（水道技術研究センター）

・浄水プロセスで発生する固形物へのフタル酸ジ2-エチルヘキシル濃縮と固形物中有機物組成との関係

＊Yongyod Thaveemaitree（東京大学）
中島　典之（東京大学）
古米　弘明（東京大学）
国包　章一（国立保健医療科学院）

・膜通気型生物膜リアクタの有用性評価－酸素供給制限下における硝化の安定性

＊寺田　昭彦（早稲田大学）
山本　哲也（早稲田大学）
五十嵐良太（早稲田大学）
常田　　聡（早稲田大学）
平田　　彰（早稲田大学）

・水熱反応による余剰汚泥の生物学的リン除去の炭素源としての再利用

＊Kyoungrean Kim, Ph, D.（豊橋技術科学大学）
藤田　昌史（山梨大学）
大門　裕之（豊橋技術科学大学）
藤江　幸一（豊橋技術科学大学）

・2槽式流動層MAPリアクターを用いた高効率リン回収方法の検討

＊島村　和彰（㈱荏原製作所）
石川　英之（㈱荏原製作所）
田中　俊博（㈱荏原製作所）

・緑農地施用後の下水汚泥コンポスト中の内分泌かく乱物質の挙動

＊南山　瑞彦（独立行政法人土木研究所）
落　　修一（独立行政法人土木研究所）
鈴木　　穣（独立行政法人土木研究所）

・二次代謝物（ジェオスミン）によるコンポストの腐熟度の評価に関する研究

＊今井　　剛（山口大学）
李　　華芳（山口大学）
浮田　正夫（山口大学）
関根　雅彦（山口大学）
樋口　隆哉（山口大学）

・亜硫酸パルプ廃水の嫌気性処理における限定曝気の影響

＊周　　偉麗（山口大学）
今井　　剛（山口大学）
荒井　　大（山口大学）
浮田　正夫（山口大学）

・中国都市水道の急速拡大戦略

＊黄　　建元（前澤工業㈱）
呉　　秀萍（元埼玉大学）
高　　賛覚（香港水務省）

・水道配水システムにおける生物膜の形成に及ぼすリンの影響

＊笠原　伸介（大阪工業大学）
前田　和孝（ミウラ化学装置㈱）
石川　宗孝（大阪工業大学）

・札幌市水道局における環境配慮型経営

＊齋藤　　健（札幌市水道局）
住友　寛明（札幌市水道局）
小田　直正（札幌市水道局）

・河川水質自動観測所を活用した現地魚類曝露試験法の開発

＊東谷　　忠（独立行政法人土木研究所）
宮島　　潔（独立行政法人土木研究所）
中田　典秀（独立行政法人土木研究所）

八十島 誠（独立行政法人土木研究所）
田中 宏明（京都大学）
鈴木 穣（独立行政法人土木研究所）

・ヒト肝臓ガン細胞を用いた多環芳香族炭化水素類のバイオモニタリング
＊Sebahat Seker（岡山大学）
荒川 研祐 （岡山大学）
関口 幹周 （岡山大学）
小野 芳朗 （岡山大学）

・篩分した河川底泥中に存在するダイオキシンの定量
＊尾崎 博明（大阪産業大学）
谷口 省吾（大阪産業大学）
高浪 龍平（大阪産業大学）
下向 教文（大阪産業大学）
濱崎 竜英（大阪産業大学）
菅原 正孝（大阪産業大学）
Rabindra Raj Giri（大阪産業大学）

・東京都水道局における調達手法多様化への取り組み
＊黒沼 靖（東京都水道局）

・活性汚泥の自己酸化課程における毒性物質の発現と親水性有機物の挙動に関する研究
＊成田 裕樹（北海道大学）
船水 尚行（北海道大学）
高桑 哲男（北海道大学）
国本 学（北里大学）

・環境水による杉花粉アレルゲンの溶出と吸着濃縮
＊下ヶ橋 雅樹（東京大学）
福田 剛之（東京大学）
藤井 隆夫（東京大学）
酒井 康行（東京大学）
迫田 章義（東京大学）

・バングラデシュ国ナワブガンジ市における地下水のヒ素汚染－他の金属・イオン類との関連性に焦点を当てて－
＊大野 浩一（北海道大学）
古川 明彦（北海道大学）
林 健司（北海道大学）
亀井 翼（北海道大学）
眞柄 泰基（北海道大学）

・糞便のコンポスト化反応における窒素の挙動に関する研究
＊Lopez Zavala Miguel Angel（北海道大学）
船水 尚行（北海道大学）
高桑 哲男（北海道大学）

・ディスポーザを組み込んだ嫌気・好気プロセスによる厨芥の処理に関する研究
＊今井 剛（山口大学）
劉 予宇（山口大学）
浮田 正夫（山口大学）
関根 雅彦（山口大学）
樋口 隆哉（山口大学）

・バイオトイレコンポスト抽出水の毒性評価
＊柿本 貴志（北海道大学）
今井 陽介（北海道大学）
船水 尚行（北海道大学）
国本 学（北里大学）

・ハイシリカゼオライト吸着剤を用いたオゾン処理による水道原水中の２-MIB 分解と臭素酸イオン生成抑制の両立
白石 賢司（環境省）
藤田 洋崇（財団法人産業創造研究所）
＊下ヶ橋雅樹（東京大学）
藤井 隆夫（東京大学）
泉 順（環境省）
秋葉 道宏（国立保健医療科学院）
迫田 章義（東京大学）

・CFD シミュレーションを用いた実オゾン反応器内の有効容積及び流動解析
＊水野 忠雄（京都大学大学院）
朴 魯錫（韓国水資源公社）
津野 洋（京都大学大学院）
日高 平（京都大学大学院）

・累乗法を用いたオゾン処理水中のヒドロキシルラジカル生成における３-クロロフェノールの影響の数量的解析
＊韓 連熙（九州大学）
輿石 一郎（九州大学）
内海 英雄（九州大学）

・化学的リン除去法を併用した生物学的栄養塩除去プロセスからのオゾンによる活性汚泥減

容化の研究
＊荒川　清美（㈱荏原製作所）
田中　俊博（㈱荏原製作所）

○ポスター論文発表（Short Oral）（16編）（＊：発表者）

・日本における水道技術の新しい展開
＊藤原　正弘（水道技術研究センター）
林　　秀樹（水道技術研究センター）

・拡張カルマンフィルターを用いた膜分離活性汚泥法の膜間差圧上昇予測
＊長岡　　裕（武蔵工業大学）
信澤雄一郎（武蔵工業大学）

・沿岸施設園芸地域の帯水層における地下水水質及び脱窒素速度の評価
＊藤原　　拓（高知大学）
山辺　敬介（四国土建㈱）
柳川瀬賢幸（愛媛大学連合農学研究科）
大年　邦雄（高知大学）

・浄水汚泥と下水汚泥の一体処理化について
＊小西　孝之（横浜市水道局）
清田　松男（横浜市水道局）
森川　純臣（横浜市水道局）
永井　康敏（横浜市水道局）
宮下　　勉（横浜市水道局）
松本　昌行（横浜市水道局）

・酸性鉱山廃水処理水が水質、底質及び底生動物に与える影響～岩手県　赤川を例にして～
＊佐々木貴史（岩手大学）
伊藤　　歩（岩手大学大学院）
相澤　治郎（岩手大学）
海田　輝之（岩手大学）

・名古屋市における配水管内容量適正化に関する研究
＊杉山　泰彦（名古屋市上下水道局）
杉野　　学（名古屋市上下水道局）

・Semi-Nested PCR による下水から単離したクリプトスポリジウムオーシストの遺伝子型解析
＊橋本　　温（阿南工業高等専門学校）
杉本ひとみ（麻布大学）
森田　重光（麻布大学）
平田　　強（麻布大学）

・クリプトスポリジウム・パルバムオーシスト検出手法の開発
＊吉野　正人（㈱東芝）
金子　政雄（㈱東芝）
豊田　和弘（㈱東芝）
原口　　智（㈱東芝）
松永　　是（東京農工大学）
竹山　春子（東京農工大学）
篠崎　洋平（東京農工大学）

・新しい DNA 波形解析法によるレジオネラ属菌の分類
＊平山けい子（山梨大学）
柳　　亨（㈱アドジーン）
落合　幸人（㈱アドジーン）
平山　公明（山梨大学）

・環境ホルモンを対象とした電気化学的処理システム開発に関する研究
＊尾花山友哉　（早稲田大学大学院）
千田　祐司　（早稲田大学大学院）
M. Prosnansky（早稲田大学大学院）
榊原　　豊　（早稲田大学大学院）

・三次処理としての効率的窒素除去のための生物膜沪過反応器の開発
＊日高　　平（京都大学・CREST of JST）
鄭　　晋宇（京都大学・CREST of JST）
津野　　洋（京都大学・CREST of JST）
竹島　大祐（京都大学）
織田　稔幸（大阪府）

・管網設計のための逐次最適化法
＊細井　由彦（鳥取大学）
ダグナチュ・アクログ（鳥取大学）
増田　貴則（鳥取大学）

・北川感潮域におけるカワスナガニの生息環境の特性とその評価
＊日宇　洋平（㈱建設技術研究所）
呉　　一権（九州大学大学院）
伊豫岡宏樹（九州大学大学院）
田篭　孝一（サンコーコンサルタント）
平田　将彦（松尾設計㈱）
李　　昇潤（九州大学大学院）
山西　博幸（佐賀大学）
楠田　哲也（九州大学大学院）

・21世紀における日本の水域総合管理と水道
＊坂本 弘道
(㈳日本水道工業団体連合会)
・アサリの生化学的レスポンスに対するマンガン曝露の影響
＊古賀 実（熊本県立大学）
馬場 歩（熊本県立大学）
志方 恵美（熊本県立大学）
堤 裕昭（熊本県立大学）
・給水安全度向上に向けた水の有効利用実態調査
＊芦田 裕志（東京都水道局）

科学技術プログラムは口頭発表以外にポスター発表が地下1階から1階までの展示会場に通じる通路及び2階のロビーで行われ、総ポスター発表数は381題のうち、日本が採択されたポスター発表論文は以下の21題であった。

○ポスター論文発表（21編）（＊：説明者）

・活性炭処理における基質除去速度と使用済み炭再利用のバランス保持
＊大谷 昌巳（阪神水道企業団）
佐々木 隆（阪神水道企業団）
・埋立地浸出水処理における GAC 上への Ca の蓄積と2,4-DCP の吸着容量に及ぼす影響
＊Mr. Esteban Roberto Mino Avila(広島大学大学院)
奥田 哲士（広島大学大学院）
西嶋 渉（広島大学大学院）
岡田 光正（広島大学大学院）
・化学工場廃水処理プラントの処理性能及び生物膜内の機能と生態学的構造の解析
＊佐藤 久（八戸工業大学）
山川 岳志（㈱荏原製作所）
岡部 聡（北海道大学大学院）
渡辺 義公（北海道大学大学院）
・IWA RWQM No. 1を用いた都市中小河川の再生に関する研究
＊川本 亮介（早稲田大学大学院）
榊原 豊（早稲田大学大学院）
・新規凝集剤によるクリプトスポリジウム・オーシストの除去改善
＊奥田 哲士（広島大学大学院）
Phengxay Deevanhxay
（広島大学大学院）
西嶋 渉（広島大学大学院）
岡田 光正（広島大学大学院）
長谷川孝雄（水道機工㈱）
・東京湾流域内の下水処理場を対象とした排出権取引制度導入による汚濁負荷物質削減費用の節約効果
＊石田 整（東京大学大学院）
花木 啓介（東京大学大学院）
荒巻 俊也（EEM-SERD-AIT）
・管網の耐震性評価に基づく配水ブロックの投資効果について
＊村上 博哉（大阪市水道局）
田中 博（大阪市水道局）
・日本水道協会によるクリプトスポリジウム・オーシスト検出のための新しい試験方法の提案
＊石橋 良信（東北学院大学）
木村 憲司（前澤工業㈱）
井上 亘（兵庫県企業庁）
・Ames 変異原性試験による日本の2河川の水道原水及び水道水の評価
＊小松 俊哉（長岡技術科学大学）
古関 健一（長岡技術科学大学）
奥田 絵美（長岡技術科学大学）
姫野 修司（長岡技術科学大学）
藤田 昌一（長岡技術科学大学）
・簡易形成バイオフィルムを用いたハロゲン系殺菌剤の効力評価
＊立川眞理子（日本大学）
手塚 雅勝（日本大学）
森田 昌宏（ケイ・アイ化成㈱）
磯貝 勝久（ケイ・アイ化成㈱）
岡田 昌二（静岡県立大学）
・放射線による Cryptosporidium parvum の不活化
＊森田 重光（麻布大学）
平田 強（麻布大学）
・日本と地球をつなぐ水資源機構の構築について
＊畔柳 剛（㈱シーエーアイ）
・日本国内における MF 膜沪過設備の実施例
＊古屋 弘幸（水道機工㈱）
神保 吉次（水道機工㈱）
矢田 修平（水道機工㈱）

・水道水における塩素と消毒副生成物：モニタリングとモデル式による制御
　＊杉本　智美（名古屋市上下水道局）
・水道水源における溶存有機物特性指標としての細菌群集の16SrRNA 遺伝子及びカテコールジオキシゲナーゼ遺伝子の評価
　＊春日　郁朗（東京大学大学院）
　中島　典之（東京大学）
　古米　弘明（東京大学大学院）
・高温好気処理法による豚舎廃棄物分解過程のシミュレーション解析
　＊西村　　修（東北学院大学大学院）
　中野　和典（東北学院大学大学院）
　野村　宗弘（東北学院大学大学院）
　田　　庚昊（東北学院大学大学院）
・水の安全保障に向けた統合的水管理と国際協力
　＊小野田　都（名古屋市上下水道局）
　竹内　公二（名古屋市上下水道局）
　中村　章男（名古屋市上下水道局）
・公営水道事業における経営と執行の分離
　＊石井　正明（東京都水道局）
・河川微生物による８種のビスフェノールの生分解
　池　　道彦（大阪大学大学院）
　陳　　旻瑜（大阪大学大学院）
　村井　裕作（大阪大学大学院）
　清　　和成（大阪大学大学院）
　藤田　正憲（大阪大学大学院）
・Hatta Number と Enhancement Factor を考慮したビスフェノールＡの半回分式オゾン処理のモデル
　＊金　　成恩（京都大学大学院）
　朴　　魯錫（韓国水資源公社）
　山田　春美（京都大学大学院）
　津野　　洋（京都大学大学院）
・都市の水使用：国際比較から学ぶ
　＊Dr. Magnus Bengtsson
　　（科学技術振興機構）
　荒巻　俊也（アジア工科大学院）
　大瀧友里奈（東京大学大学院）
　大瀧　雅寛（お茶の水女子大学大学院）

6）　スペシャリスト・グループの会合

IWA に設置されている44のスペシャリスト・グループのうち、12のスペシャリスト・グループ会合が９月20日（月）午後から９月23日（木）午前にかけて、グループ毎に２時間程度開かれ、その一部の会合は公開会議であった。

7）　ウェルカム・レセプション

９月19日（日）午後６時30分から Ali Fassi Fihri 会議会長主催のウェルカム・レセプションが Kempinski Mansour Eddahbi ホテルのプールサイドで行われた。レセプションはカナッペスタイルでビールなどの飲み物とスナックだけであり、楽団演奏もプールサイドでなされていたため、少し騒がしく雑談していてもしばしば会話が聞こえないこともあった。なお、ウェルカム・レセプションは、午後９時30分過ぎに終了した。

8）　Gala ディナー

９月22日（水）午後７時30分から世界会議参加者全員を Kempinski Mansour Eddahbi ホテルからバスで郊外のシェアリにある、マラケシュで一番有名な見世物の一つであるモロッコ伝統騎馬芸「ファンタジア」に案内された。バスを降りて場内に入ると大音響でロック調のアンダルシアの音楽がスピーカーから流れ、ホテルからバスでやってきた参加者は中央の運動場規模のグラウンド周辺に設置されているベルベル風の大テントに案内された。しばらくするとテントの中へは地方の民族衣装を着た男女の楽団が入れ替わり立ち代わりやって来てはドンチャンと奏でて去って行く。これで興奮せずにはいられぬような深層心理をうまく突いた演出だと思う。そしてタイミングを見計らい民族衣装をまとった女性達が堰を切ったように客の手をとり踊り場へ誘導しダンス。とにかく、祭りを模したショーはこうして進行している。テントにいるお客様にはモロッコ料理が振る舞われ、それを食べて終わり近くになると会場の中央にあるグラウンドでファンタジアショータイムがあった。ショーはベリーダンスやアクロバットな馬乗り、モロッコの民族衣装を着た人のパレード、馬に乗った騎士達が銃を持って走りながら発砲する有名なシーンもあった。ショーは１時間程度で終了した。

さらに、別途9月21日（火）に会費制（60ユーロ）でディナー・パーティーがあった。

9） 総括発表（Plenary Session）

9月23日（木）に先日開会式が行われた同会場Ministresホールにおいて、午後2時から午後3時30分までMichael Rouse IWA会長の座長・進行役で総括発表が開催された。総括発表は7分野のリーダーが総括報告した。総括発表の内容を要約すると以下の通りである。

・上下水道システムの管理（発表者：Amy Bowman氏）

Amy Bowman氏は、今回の世界会議において、上下水道システムの管理では処理コストの低減化、上下水道システムの管理能力、最適な上下水道システム、厳しい規制の達成、老朽化したインフラ施設の管理などについて26ヵ国から発表があった旨報告を行った。

・下水処理プロセスにおける革新的技術（発表者：Harro Bode氏）

Harro Bode氏は、下水処理に関する発表が口頭発表で230題、ポスター発表で130題もあり、さらにワークショップも下水処理プロセスで4つ開催した旨報告を行った。

・浄水処理における革新的技術（発表者：Rhodes Trussell氏）

Rhodes Trussell氏は、浄水処理に関する革新的な発表がオーストラリア、オーストリア、ブラジル、カナダ、中国、デンマーク、エジプト、フィンランド、フランス、アイルランド、イタリア、日本、韓国、マレーシア、メキシコ、モロッコ、オランダ、ニカラグア、ノルウェー、オマーン、ポルトガル、ルーマニア、スペイン、台湾、トルコ、英国、アメリカ合衆国の27ヵ国から浄水場の設計、吸着、飲料水の生物処理、凝集、色度の除去、膜処理、消毒と副生成物、オゾン酸化などについて行われ、これに関する質疑応答を行った旨報告を行った。

・総合的水資源と河床管理（発表者：Helmut Kroiss氏）

Helmut Kroiss氏は、総合的水資源と河床管理の現況について述べた後、今回の世界会議において総合的水資源と河床管理で約200題の論文が提出され、口頭発表で75題、ポスター発表で40題の論文が採択されて発表した。さらに、これに関する4つのワークショップも開催され、発表者は世界27ヵ国に上った旨報告を行った。

・ウォーター・サービスと経済（発表者：Francisco Cubillo氏）

Francisco Cubillo氏は、ウォーター・サービスと経済では11の分科会、さらに11のワークショップが開催された。主たる演題としては料金、規制、官民提携、リスク管理、資産管理、経営効率、ベンチマーク、契約、持続可能な将来展望で、今後はこれらに関して総合的なアプローチ、新しい規制の枠組み、管理と決定ツール（経済性、公共参加、ベンチマーク、末端顧客の分析、官民提携、財政）、巨大都市、持続可能な将来ビジョンについて挑戦していかなければならないと報告を行った。

・水と健康（発表者：Willie Grabow氏）

Willie Grabow氏は、水と健康についての報告が、これまで基本的なアカデミックな研究が主であったが今回は問題解決の応用研究が多く、また「水質と健康の地球的な未来」、「クリプトスポリジウム遺伝子」、「開発途上国における家事用水処理」、「貧困層へのウォーター・サービス」、「WHOプログラム」のワークショップも開催した旨報告を行った。

・エコロジカル・サニテーション（発表者：Ralf Otterpohl氏）

10） 閉会式など

閉会式は9月23日（木）午後4時30分から開催された。

まず、閉会式は開会式と同じホールで、司会・進行役はIWA専務理事のPaul Reiter氏が行い、最初にMichael Rouse会長が挨拶に立ち、すばらしい会議であったこと、そして、Ali Fassi Fihri会議会長を中心に今日までの労をねぎらった。そして、参加してくださった皆様方もすばらしい思い出で新しい友好の場をもたれたことと思うと語った後、Ali Fassi Fihri会議会長を壇上に上がるように促して、記念品をMichael Rouse会長からAli Fassi Fihri会議会長に贈呈した。会場からは大きな拍手喝采が起こり、Ali Fassi Fihri会議会

長がしばらくして「今回の会議の成功は皆様方のご協力のお陰であり、併せてIWAのMichael Rouse会長を先頭にロンドンオフィスのご支援で成功を収められた」と謝辞を述べ、次回の北京における世界会議の成功を祈願すると締め括られた。この後、Ali Fassi Fihri会議会長からMichael Rouse会長にお礼の記念品が手渡された。

閉会式の最後では、Michael Rouse会長が退陣挨拶をされて、新会長であるハンガリーのブタペスト大学Laszlo Somlyody教授を紹介して舞台に上がるように求めた。そして、会長のメダルがMichael Rouse会長からLaszlo Somlyody教授に授与され、会場の出席者から大きな拍手を受けた。続いて、新会長であるLaszlo Somlyody教授が挨拶に立たれ、Michael Rouse前会長のIWAの功績を称えられて併せて抱負を述べ、最後にIWA首脳会議、新しい会長会議メンバーが紹介された。その中に京都大学の松井三郎教授の名前もあった。その後、Ali Fassi Fihri会議会長が舞台に立ち、次回の世界会議の会議会長であるQiu Baoxing会議会長の代理としてLi Zhendong氏との間で引継式が挙行され、1998年のIAWQバンクーバー世界会議から続いているトーキィ・スティックをAli Fassi Fihri氏からLi氏に手渡された。次期会議会長であるLi氏が挨拶に立ち「今回のマラケシュ世界会議はすばらしかった。次回の北京世界会議は北京オリンピックのようにうまく開催する自信があることを今晩皆さん方の前で約束する。ホームページに逐次世界会議の論文・展示会の募集内容などを掲載していく」などと語った後、北京市の紹介ビデオが上映されて、閉会式が終了した。

11）　技術視察（Technical Tours）

今回のマラケシュ世界会議の技術視察には、Imfout Hydraulic ComplexとHassan 1st Hydraulic Complexの2つのコースがあった。そのうち前者の技術視察にはDaourat浄水場の視察が含まれていた。技術視察は、9月22日（水）と9月23日（木）に予定されていたが、会議会場での広報より、技術視察の集合時間が前者が午前6時、後者が午前5時30分になったので、かなりの参加者が取り止めたりされた。

なお、技術視察は有料で前者が40ユーロ（約5,600円）、後者が50ユーロ（約7.000）であった。

12）　会議前視察旅行（Pre Congress Tour）

会議前視察旅行は、「インペリアル・モロッコ」と称して、9月16日（木）から9月19日（日）にかけて3泊4日で実施された。参加費は1人の場合488ユーロ（約68,000円）、2人の場合760ユーロ（約106,000円）であった。

13）　会議後視察旅行（Post Congress Tours）

会議後視察旅行は、「インペリアル・モロッコ」と「The Great South」と称して、2つのコースについて実施された。日時は前者が9月23日（木）から9月26日（日）、後者が9月23日（木）から9月25日（土）にかけて実施された。参加費はそれぞれ1人の場合275ユーロ（約38,000円）、395ユーロ（約55,000円）、それから2人の場合500ユーロ（約70,000円）、590ユーロ（約82,000円）であった。

14）　レディスプログラム

会議参加者の同伴家族を対象としたレディスプログラムは下記の5つのコースについて有料で実施された。

マラケシュ市内観光（半日）
…実施日：9月18日～19日／9月21日～23日
参加費：12ユーロ（約1,680円）

マラケシュ市内観光（終日）
…実施日：9月18日～23日
参加費：12ユーロ（約1,680円）

エッサウィラ観光
…実施日：9月18日～23日
参加費：45ユーロ（約6,300円）

Ourika峡谷観光
…実施日：9月19日、9月21日、9月23日
参加費：20ユーロ（約2,800円）

Kik高原観光
…実施日：9月18日／9月21～22日
参加費：59ユーロ（約8,260円）

15）　シャトルバス

空港及び国際会議場から市街のほぼ中心部にある各ホテルを連絡する公共交通機関は会議参加者を輸送するには極めて不充分であり、不便であることからシャトルバスが運行された。会議に出席するための朝の会議場行きのバス、並びに会議終了後ホテルに直帰するシャトルバスのみ無料で運

行された。しかし、空港から各ホテルまでは有料で5ユーロ（約700円）であった。

3. 第8回IWA役員会議の概要

第4回IWAマラケシュ世界会議が開催されるのに併せて、第8回IWA役員会議が9月15日（水）から19日（日）まで国際会議場2階のフェス1ミーティングルーム他で開催された。9月15日（水）は午前9時から終日「会長会議」、9月16日（木）は「プログラム委員会」、9月17日（金）は「戦略評議会」、そして9月18日（土）は「理事会」がそれぞれ開催された。最終日の9月19日（日）は会長会議、理事会、戦略評議会、プログラム委員会の役員メンバー及び同伴者、さらにIWAロンドン・オフィスの職員と名誉会員などで役員視察旅行が行われた。以下に今回の役員会の内容を要約して記述する。

1） 会長会議（Executive Committee Meeting）（9月15日（水））

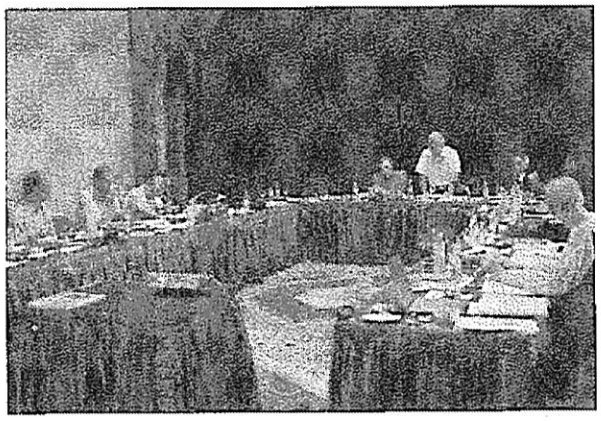
会長会議のメンバーは、丹保前会長の他にMichael Rouse会長（英国）、Laszlo Somlyody戦略委員会議長（ハンガリー）、David Garman副会長（オーストラリア）、Eugene Cloete副会長（南アフリカ）、Ali Fassi Fihri2004年マラケシュ会議会長（モロッコ）、Mogens Henze出版委員会議長（デンマーク）、Jerry Gilbert MPC議長（米国）、Juan Ras財務官（スペイン）、Blanca Jimenez女史（メキシコ）、Peter Bhembe氏（スワジランド）、Paul Reiter専務理事の12人で構成されている。IWA事務局からLaura Moore専務理事秘書が書記、Mark Pascoe副専務理事、Andrew Speersプログラムマネジャー、Satkunam Murugathas財務コントローラもオブザーバーとして出席している。しかし、今回の会長会議にはJerry Gilbert MPC議長、Juan Ras財務官が欠席された。

会長会議はIWAの首脳会議であり、我が国からは会長会議メンバーである丹保前会長しか出席できなかったので、その詳細については知ることができなかった。今回の会長会議の議題は以下のような項目であった。

1. 開会の辞
2. 欠席者の確認
3. 前回の会長会議（平成16年6月11日～12日、オーランド市）の議事録
4. 2.の質疑応答
5. 今回の会長会議の予定議題
   ビジネス・ミーティング
6. 今回理事会の予定議題
7. 今回の戦略評議会の予定議題（新メンバーの選出を含む）
8. スペシャリスト・グループ／ウィンザーII
9. 2005年IWA理事会（新会長の選出を含む）
   IWAの地域報告と討議
10. 地域の活動状況報告／提案
    IWAプログラム・リポート
11. IWA出版業務
12. 若い会員に対するIWA事業
13. 水道事業体に対する事業
14. IWAからの表彰
    IWA会議
15. 2004年マラケシュ世界会議
16. 2006年北京世界会議の準備状況
17. 各種先端会議とプログラム
    マーケット、会員、財政、効率
18. 会員とマーケット
19. 財政／効率／予算
20. 事業計画
21. その他
22. 次回の会長会議

なお、丹保前会長は今回の会長会議で全ての役員業務から退かれることになったが、会長会議の最後の場で退任の挨拶をされた。

2） プログラム委員会（Programme Committee）（9月16日（木））



日本からは北海道大学の渡辺大学院教授がこのプログラム委員会の委員に所属しているが、今回は欠席されたのでこの委員会の詳細は不明である。しかしながら新しいプログラム委員会議長にはオーストリアの Helmut Kroiss 教授が就任された。

3）　戦略評議会（Strategic Council Meeting）（9月17日（金））

戦略評議会には日本から東京大学の大垣大学院教授と東京都水道局の松井部長が出席され、竹中国際課長もオブザーバーとして出席した。今回の戦略評議会は最初の戦略評議会の任期が終わりに近づいていることからマラケシュでは戦略評議会のこれまでの活動実績と将来の運営方法について検討する機会が設けられた。事前に議題だけ提示されただけで評議会が開催され、まず、Laszlo Somlyody 議長が開会の挨拶、引き続いて Paul Reiter 専務理事が今回の戦略評議会の議題について説明された。以下に各議題について概要を記述する。

a）Laszlo Somlyody 議長よりこれまでの活動実績が報告された。すなわち、戦略評議会は IWA の戦略的方向性についての指針を会長会議及び理事会に提供し、IWA での会員活動の展開や調整を行うために設置された組織である。戦略評議会の具体的な責務は、①IWA 会長会議及び理事会に対して助言を行う、②スペシャリスト・グループの活動とグループ間の連携を奨励・促進させる、③新たな利益団体と IWA の関係を密接にする、④IWA 戦略的プログラムを実行する、⑤出版委員会と戦略的な協調関係を確保する、⑥政策などを再検討する、などである。そして過去3年間に活動してきた事業について以下のようなことを言及された。

・会員向けニュースレターの発行
・京都市で開催された世界水フォーラムにおいて後述する4つのタスクフォースを発足させた。
・IWA 年会費構造の再検討と低所得国向け年会費体系の確立
・スペシャリスト・グループを対象とした調査の開始、すなわち、スペシャリスト・グループの活動と IWA ロンドンオフィスの支援に対するレビュープロセスの開始
・IWA 戦略プログラムの再検討

そして戦略評議会はその効果をさらに高める方法について審議した。戦略評議会は発足当初は比較的頻繁に会合を開き、広範な問題について検討してきた。しかし、戦略評議会の役員の間で、少数の問題についてより深く検討する機会にきているということについて意見の一致を見た。そのために戦略評議会そのものの「戦略プログラム又は行動プログラム」を構築することと、戦略評議会がアイデアを出し合い、その優先順位を決定し、それを実行していくためのプロセスを厳格で透明性のあるようにすべきであると提案された。

b）戦略評議会の新委員（任期：2004年9月より2年間）の選出方法

事務局から、スペシャリスト・グループからの15名選出については、推薦された候補者の中からスペシャリスト・グループの議長、副議長、事務局長によって20名を選出して会長会議に提案して15名を選出してもらう。分野別代表（水道事業体5名、コンサルタント2名、規制機関2名、研究機関1名、個人研究者1名、産業界1名、装置製作会社1名）については現在の委員と新しく推薦された候補者を個人会員、法人会員で水道事業体10名、コンサルタントと規制機関7名、残りの研究機関・個人研究者・産業界・装置製作会社5名を選出してもらって会長会議に最終決定してもらう案を提案したが、これとは別に正会員だけで会長会議に提出する人数を絞り込むという代替提案もあり、最終的には翌日の理事会に提案することになった。開発途上国からの5名の選出については推薦された候補者から10名を正会員で選出して会長会議によってその中から5名を選出してもらう提案で特に異議はなかった。

今後の日程は10月31日に IWA のホームページに候補者を開示し、11月1日から11月30日まで投票してもらって来年2月に開催予定の会長会議で新しい戦略評議会委員を決定してもらう日程となっている。

c）2002年度～2004年度の戦略評議会のレビュー

Laszlo Somlyody 議長が今回の戦略評議会が最後の会議になるので、2002年度から今回までの戦略委員会の活動状況をレビューされた。

d）タスク・グループからの報告

昨年京都で開催された第3回世界水フォーラムで、IWA が小冊子を作成して提案した①安全な水の提供、②代替サニテーション、③乾燥地帯、④水と健康、の4つの課題について、タスク・グループを作ってさらに検討しており、その進捗状況について報告があった。

e）IWA ロンドンオフィスのスペシャリスト・グループに対する支援状況・質・スピード、さらに IWA が発行しているメンバー・ニュースレター、Water 21、会員名簿、さらにウェブサイトに関する IWA ロンドンオフィスがアンケートを行った結果について報告があり、それぞれ前者については満足している、後者については重要であるという評価であった。

f）水道事業体に対する IWA の事業展開と課題

過去20年間、世界中の水道界は大きく変化してきている。IWA も発足以来、水道事業体の課題について情報交換する場として CEO フォーラム、ワークショップ、資産管理に関する先端技術会議、さらに5～6のスペシャリスト・グループを持っているが、さらに水道事業体に対する IWA の事業を発展させるために Michael Rouse 前会長を座長とする「水道事業助言タスク・グループ（Adhoc Utility Advisory Task Group）」を発足される。そしてメンバーは戦略委員会の水道事業体の委員と IWA 水道事業体会員から選出される。

g）IWA 出版

出版担当の Michael Dunn 出版局長が現在の出版状況について説明され、今後、アカデミックな分野とプラクティカルな分野をうまく加味させて出版したいので意見を聞きたいという提案があった。戦略委員会の委員から広範囲に意見が出て、今後これらの意見を生かして出版していきたいと述べられた。

h）2005年度の IWA 事業戦略

出席者全員に①IWA の将来戦略は何か？②それを成功させていくためにどうしていかなければならないか？ ③さらに会員に対してどの分野の会員をみていかなければならないか？ ④特に重要な課題を3つ挙げることについて20分間で書いて提出することが求められ、そのうち数人については指名して発表するように求められた。

i）新しい戦略評議会議長の推薦

Laszlo Somlyody 会長が今回で戦略評議会の議長を退かれるので、今回出席された戦略評議会の委員で新しい戦略評議会の議長候補の投票が行われ、Blanca Jimenez 女史（メキシコ）、Eugene Cloete 教授（南アフリカ）、Goen E Ho 教授（オーストラリア）、Renato Parena 氏（イタリア）の4名が上位候補となり、その後この4名から3名に絞り込む投票が行われた。その結果、Goen E Ho 教授を除いた3名が会長会議に推薦された。

4） 理事会（Board Meeting）（9月17日（金）／9月18日（土））

IWA 理事会は、9月17日（金）の戦略評議会の後、午後5時から午後6時15分まで国際会議場2階フェス1ミーティングルームで、さらに翌日の9月18日（土）午前8時15分から午後5時までアトラスホテル地下1階レイサンニ・ルームで開催された。理事会には日本から丹保前会長、大垣理事、赤川理事の3人が出席され、村元研修国際部長、竹中国際課長も IWA の Paul Reiter 専務理事の計らいでオブザーバーとして会場に入ることができた。理事会の概要について以下のとおりである。

9月17日（金）午後5時からの理事会では、まず Michael Rouse 会長がマラケシュに参集してくれた各国の理事に対して歓迎の辞を述べて議事に入った。議事の最初は、Paul Reiter 専務理事が副会長選挙の方法について説明し、立候補している6名（松井三郎京都大学大学院教授、Zaini Ujang マレーシア工科大学教授（マレーシア）、Eugene Cloete プレトリア大学教授（南アフリカ）、David Garman 博士（オーストラリア）、Lin Wang 教授（中国）、Joan Rose ミシガン州立大学教授（アメ

リカ合衆国)）から各自約4分間の立候補演説があり、その後質疑応答があった。そして投票が翌日18日（金）の朝一番にあり、さらに午後5時過ぎまで多くの議題が審議された。9月18日の理事会の内容を以下に各議題についてその概要を示す。

(1)　開会の辞

Michael Rouse 会長の「開会の挨拶」に引き続いて、理事会に出席している参加者数をチェックされた後、理事会を開催する定足数を満たす正会員が参加していることが確認できたとして正会員数を公表した。

(2)　前回の理事会議事録の承認

2003年9月6日にチェコ共和国プラハ市で開催された理事会の議事録について審議され、承認された。

(3)　理事会審議議題

当初予定していた議題を若干変更して審議していくと Michael Rouse 会長から理事に伝えられた。

(4)　IWA 副会長選挙

副会長選出の議事に入る前に書類が配布され、Michael Rouse 会長から副会長及び会長選挙の投票手続きについて、以下の2つの問題点が存在していると言及された。

すなわち、

①　Michael Rouse 会長は、中国の国内委員会から Lin Wang 教授の副会長立候補について同委員会は指名していないという文書を受理し、これを理事会で読み上げるよう要請を受けたこと。

①に関して、理事会で審議され、その結果「IWA 定款に従い、同教授の副会長立候補は有効とするが、中国国内委員会から出された文書は要請通りこの理事会で読み上げる」と決議され、文書は Michael Rouse 会長が朗読した。

②　Michael Rouse 会長はノルウェー国内委員会から IWA 会長立候補者の適格基準を改正すべきであるという提案書を受理していること。

②に関して、IWA 定款では会長立候補者を指名するのは理事会の会員でなければならず、会長選挙の立候補者は例外的な状況を除き、以下の基準の一つ、あるいはそれ以上を満たす IWA 会員の中から選ばれなければならないと規定している。

－最近4年以上にわたり会長会議に籍を置いた者。
－現在副会長を勤めている者。
－現在、理事会や戦略評議会の構成員であるか、又は以前に IWA、IAWQ、IWSA のいずれかの科学技術評議会若しくは水管理政策評議会のどちらか一つ、又は両方の構成員であるなど、いずれにしても前述の一つ又は複数の評議会の構成員として4年間継して籍を置いた者。

ノルウェー国内委員会は、前述の会長選挙の立候補者適格条件を次のように改正するよう提案された。「IWA の会員（個人、正、又は理事）であれば、その人物を理事会会員1名が会長候補者として指名し、かつもう1名の理事会会員がこれを支持していることを前提に何人でも会長選挙の候補者になりえる」というもので、ノルウェー国内委員会が提案したのは IWA の構成員であることを会長選挙立候補の唯一の要件とする民主的な立候補手続きであった。

Michael Rouse 会長は IWA の構成員であれば何人でも立候補者として指名されることが可能な開放度の高い制度を導入すべきか否かを理事会会員の票決にかけると言及された。Michael Rouse 会長は投票後、会長選挙の立候補者の指名手続きについては現行の IWA 定款の通りとすると決議された。

以上のようなやりとりがあって本題の2004年9月から2006年9月を任期とする IWA 副会長選出のための投票に入った。まず、Paul Reiter 専務理事が電子投票の方法と選出の仕方について説明した後、投票が行われた。投票は4回行われ、それぞれの投票で最下位の人が落選していく方法で、以下に落選した候補者名を落選順に記述する。

第1回投票で、南アフリカの Eugene Cloete プレトリア大学教授が落選

第2回投票で、アメリカ合衆国の Joan Rose ミシガン州立大学教授が落選

第3回投票で、中国の Lin Wang 教授が落選

第4回投票で、京都大学の松井　三郎教授が落選

以上の投票結果で、最終的に6名立候補された副会長候補者のうちオーストラリアの David Garman 博士が引き続きシニア副会長、マレーシアの Zaini Ujang 教授がジュニア副会長に当選さ

れた。

次いで、IWA会長選挙の手続きについて、イスラエルの理事であるAvner Adin氏から問題が提起された。会長選挙は隔年に開催される世界会議の間の年に実施されているが、隔年開催の世界会議と併行して開かれる理事会には他の時期の理事会よりも多くの理事が出席するのが通例となっていると、同氏は指摘された。そこで、さらに多数の理事が選挙手続きに参加できるよう選挙時期を変更すべきではないかと提案があった。審議の後、選挙時期の見直しの必要性について票決することになり電子投票された。投票の結果、大多数の理事は当面の間現行の選挙時期を支持する選択へ賛成票を投じた。

さらにAvner Adin氏は、もう一つの問題として電子投票と電子投票システムの認定の重要性を指摘した。これに対して、Michael Rouse会長は、次回からの電子投票による選挙についてはこの理事会の理事から2名を依頼するので電子投票システムの信頼性を実証することで決議した。

(4) 2010年世界会議の開催都市

Michael Rouse会長とPaul Reiter専務理事から、2010年世界会議の開催地域の選定について会長会議から理事会での審議を求めると勧告していることが報告され、出席した理事全員がアメリカ合衆国内のどこかの都市で世界会議開催に賛成するか否かを問う電子投票が実施された。投票の結果94%の理事が賛成を投じ、2010年世界会議はアメリカ合衆国内で開催されることになった。

この票決後、北米、中南米の中のいずれかの都市を対象に選定手続きを進めるのか、それともアメリカ合衆国に限定して手続きを進めるのかどうかについて電子投票することになった。投票の結果、過半数を占める54%の理事が投じた票の結果を受け、北米、中米、南米のどこかの都市で開催することになり、今後募集を開始して、次回の理事会で開催都市を決定することになった。

(5) 戦略評議会の新メンバーの選出

Paul Reiter専務理事が2004年9月17日の戦略評議会で議題に挙がり審議された戦略評議会の役員指名及びその投票手続きについてその概略を改めて述べられた。

① 戦略評議会メンバーのスペシャリスト・グループからの選出については事務局及びスペシャリスト・グループの共同座長や座長が指名するものとし、最終票決に関してはスペシャリスト・グループの座長がその任に当たること。

② 戦略評議会メンバーの分野別役員の選出については、理事会の理事がこれを指名し、各分野の会員が票決すること。

③ 開発途上国からの戦略評議会役員メンバー選出については、開発途上国の理事会の理事全員がその指名及び票決に当たること。

その後審議に入り、戦略評議会の分野別役員の選出については、二段階方式の票決手続きを導入し、理事会の理事も分野別役員の票決に当たるべきであるとの勧告を戦略評議会が決めたこと、さらに戦略評議会では、長い任期も視野に入れた選挙方法についても考慮することが重要であり、問題点については会長会議と審議を深めるべきであるとの点で合意された。新戦略評議会では将来に向け適切な選挙手続きとし、同評議会役員の半数の任期も4年とし、残る半数の任期を2年とする提案に取り組んだ。この提案については今後検討していくことで決着した。

すべての分野別役員について、二段階方式の票決によって選出する方法に変更すべきか、それとも理事会の理事全員が候補者を指名し分野別の会員が票決するという従来方法を取るかについて審議が行われ、その決定を理事会による票決に委ねることになった。投票の結果、二段階方式の票決手続きを行う方法へ変更することになった。フランスの理事から戦略評議会の分野別役員の選出に関し、さらに以下の条件を付け加えたいとの提案があり、前述の二段階方式に適用することで決議された。

① 各分野にある理事会の理事の属するところから複数の立候補者が立った場合、その理事が投票できる票数は1票を越えてはならない。

② 理事会の理事は、分野の持つ性格の多様性、（例えば公共事業体と民間事業体では性格が違う）を候補者の選択に反映させる姿勢を崩さずに投票すべきである。

現在の新しい戦略委員会の役員選出日程は、以

下の通り公表された。

・立候補締切　2004年10月8日
・立候補者の詳細な履歴をIWAウェブサイトに掲載　2004年10月31日
・投票開始　2004年11月1日
・投票終了　2004年11月30日
・新しい戦略評議会役員の確認　2004年2月
・新しい戦略評議会役員による第1回会合　2004年6月

(6) IWA戦略事業計画

① 2004年度のIWA戦略事業計画

Paul Reiter専務理事からパワーポイントを使って、2002年度から2年間のIWA戦略事業計画を作成し、IWAの目的に資する取り組みをしてきたが、さらに会長会議は2年間延長して4年間（2002～2005年度）のIWA戦略事業計画に基づいて活動するとともに、2004年度からは年度毎にIWA戦略事業計画を作成することになったと前置きした。続いて2002年度から2年間のIWAの活動事業、続いて「2004年度のIWA戦略事業」について説明された。

過去2年間の事業内容は、IWAが発足して今日まで2つあった評議会（STCとMPC）を合併させて戦略評議会（Strategic Council）にしたこと、スペシャリスト・グループの活動を報告するニュースレターを発行させたこと、新しい3つの最先端会議を発足させたこと、会長会議によって注意深く精査できるようにするために戦略評議会の議長に会長会議のメンバーが就任するようにしたこと、京都市で開催された第3回世界水フォーラムに小冊子を作成し、4つのタスクフォース・グループを発足させて活動して、IWAが世界でハイレベルの水専門家集団であると認められるようになってきていること、正会員と法人会員の会費の見直しをしたこと、IWAの地域活動状況を整理して活動していること、CEOフォーラムを立ち上げて活動していること、IWAロンドンオフィスの体制強化と会員支援のためにイントラネット・システムを導入してきたこと、そして財政的には2001年度に50万ポンド（約1億円）の赤字から2004年度決算見込みでは何とか赤字解消まで推移してきていること等が過去2年間の事業成果として報告された。

しかし、会員は合併によって減少してきていることなどから前述したIWAロンドンオフィスの体制強化を行ってきた。

2004年度の戦略事業計画は会長会議で以下の6つを優先活動分野とすることが決定している。

・IWAの新規会員と会費収入を増やすこと
・重点的、段階的計画によってIWAの地域展開を推進させる
・京都市で開催された世界水フォーラムで取り上げた4つの課題に絞った活動を進める
・引き続きIWAの認知度と名声を高めていく
・引き続きスペシャリスト・グループを強化していく
・マラケシュ、北京、ウィーンでのIWA世界会議で成果をあげていく

このうち4番目のIWAの認知度と名声を高めていくことについて審議され、フランスの理事から今やIWAが国際社会で認知され信頼できる協会とみなされる時期に来ているので、IWA内部に対外向けのメッセージを作成し、そのメッセージが必ず幅広く支援され信頼性を勝ち取れる態勢を取るシステムを構築するよう勧める意見が出された。

② IWAの2004年度決算見込み

Paul Reiter専務理事が2004年度決算見込み資料を理事全員に提示した。

提出された資料によると収入3,014,263ポンド（約6億円）に対して、支出は3,124,473ポンド（約6億2,260万円）で、差し引き110,210ポンド（約2,260万円）の赤字予算となっている（表-2）。その後、以下のような質疑応答が行われた。

Q　110,210ポンドの赤字額について、IWAはどう対処しようとしているのか。

A　110,210ポンドの赤字額については、戦略事業計画策定後に会長会議において会員数の増強やマーケット支援などの活動分野へ新たに投資していくことを決定した。この決定は2004年度末から2006年度末ないしは2007年度初期の間にIWA財政の損益分岐点に効果を表すはずである。

Q　IWA展示会から得た収益は、世界会議の主催国との間で分配するのかどうか。

表-2 IWA 2004年度決算見込み

項 目	予算（£）	決算見込み（£）
歳入		
会費収入	670,415	606,390
出版物	860,000	860,000
会議	394,681	332,648
利子／投資収入	75,000	78,000
上納金	50,000	50,000
世界会議	1,087,225	1,087,225
計	3,137,321	3,014,263
歳出		
世界会議	1,034,850	1,034,850
人件費	824,008	934,853
世界会議関係	318,000	267,100
事務所借上	107,000	110,938
電話／郵便／文具	55,000	55,000
IT	63,218	27,000
会費／請求金額	108,600	122,663
ポートランドプレス費用	68,500	44,000
マーケット	49,000	57,000
法律相談関係	32,000	32,500
会議／旅費	178,505	191,000
雑費	7,000	9,000
減価償却	66,000	66,000
計	3,117,341	3,124,473
差 引	19,980	(110,210)

A IWA展示会の収益は、2001年ベルリン世界会議以降、世界会議の運営方法を見直して来た。世界会議で生じた利益や収入の分配方法が透明性を欠くものであることが判明した。IWAは収益を50対50の割合で主催者と分配する原則を導入した。この方法によって世界会議は財政面で成功を収める行事となる。

Q 法人会員の数はどれくらいが目標なのか。

A 減少傾向にあった法人会員数が逆転して増加しつつある中、目標数415はそのまま据え置くこととする。

法人会員の目標数に関するPaul Reiter専務理事の回答に引き続き、ノルウェーの理事から今後IWAは個人会員、法人会員、指名された役員に分けた形で会員数を示すべきだとの提案があった。

2006年度から2009年度までの4ヵ年戦略事業計画

Paul Reiter専務理事から2006年度から2009年度までの4ヵ年戦略事業計画の策定手続きについて以下のような説明があった。

・2004年度第4四半期に会員数の調査を実施する。
・2005年2月に2006年度から2009年度までの4ヵ年戦略事業計画（案）を発表し、その後、同計画（案）の内容について理事会、会長会議、戦略評議会及びスペシャリスト・グループと協議を重ねていく。
・2005年4月又は5月に戦略事業計画の第一案を発表する。その後、2006年度から2009年度までの4ヵ年戦略事業計画（案）をIWAウェブサイトに掲載し、会員レベルのオンライン・ディスカッションを進める（6月から7月5日にかけて）。
・2005年7月までに戦略事業計画の第二案を策定する。
・戦略事業計画の第二案をIWAウェブサイトに掲載し、2005年8月に「オンライン理事会ディスカッション・フォーラム」を開催する。
・2005年9月に開催を予定している理事会に間に合うよう行動・実施を盛り込んだ2006年度から2009年度までの4ヵ年戦略事業計画の最終案を策定する。

(7) IWAタスクフォース・グループ活動の報告

前述した戦略評議会で記述した昨年京都で開催された第3回世界水フォーラムで、IWAが提案した①安全な水の提供、②代替サニテーション、③乾燥地帯、④水と健康の4つの課題について、タスク・グループの進捗状況について報告があった。

(8) IWAスペシャリスト・グループ報告書

IWAロンドンオフィスのAndrew Speers氏が2003年9月に実施したスペシャリスト・グループ（SG）に対する支援状況・質・スピード、さらに、IWAが発行しているメンバー・ニュースレター、Water 21、会員名簿、さらにウェブサイトについてIWAロンドンオフィスがSGリーダー、座長、共同座長及び事務局長に対してアンケート調査を行い、その結果について報告された。アンケート結果は、SGもIWAロンドンオフィスもかなり高水準の実績を上げており、SGが生み出した活動の成果が認められる内容であった。複数のSGを一つにまとめると言う考えにも理事会の支援が得られた。

この調査結果の発表に引き続き、ドイツの理事

の一人であるHarro Bode氏とオーストリアの理事Helmut Kroiss教授のもとで各SGの活動状況を評価して勧告を出していくことになった。そして、これらの勧告は2005年の第一四半期にオランダのマーストリヒト市で開催されるフォーラムの席上でSGのリーダーに向けて発表する。Andrew Speers氏の報告の後で審議に入り、ポルトガルの理事より、今回IWAロンドンオフィスが実施したアンケート調査以外に各SGの構成メンバーについても調査することが重要であるとの意見が出された。この意見に対して、Andrew Speers氏は、SGリーダーなどに対する今回の調査を皮切りに、年内に実施予定の各SGの構成員調査の一環としてSG構成員に対し広範にわたって評価を下していくと述べられた。

Helmut Kroiss教授は、Harro Bode氏とともに勧告するものは、SG及び構成されている会員間の関連性に関わる重要課題の全てを短い報告書にまとめあげる構想である。そして、その報告書は、SGの業務、IWAに対するSGの義務及びSGとIWA間の情報交換に焦点を合わせたものになる。さらに、その報告書には、SGがイベントを準備する際に必要な手続きを記述した付属資料も添付する予定であると言及された。

アメリカ合衆国の理事Joan Rose教授から、自分が属するSGは非常に積極的で自発的に行動しているが、組織が成熟するにつれてリソースと支援体制を変更する必要性が生じてきている。また、SGの構成員がSGに加わった時点で抱いていた期待・願望についても評価し、その後に目標達成に必要なリソースと支援体制について検討することも必要と思われると意見を言われた。この件は、会長会議とも関連付けていく必要がある。Paul Reiter専務理事からノルウェーのスラッジ管理SGを引き合いに出して、Rose教授の発言に対して次のように発言された。

ノルウェー以外の地で同SGを代理する人物はいなかったが、会長会議の役員がスラッジ管理SGのために連絡役を果たしてくれた。このように各国にはこの種の関連性を持った組織等がある。各国の国内委員会のネットワークを開拓することが極めて有効である。

最後にBode氏が次のように締め括った。多くの会員がSGのイベントに参加されるが、これらのイベントにつぎ込まれた多額の資金はボトムアップ型で積み上げられたもので、IWAから下りてきたものではない。これらのイベントは会員間の絆を強める意味でプラスの働きをするものと捕らえるべきである。SGのイベントやワークショップはIWAの屋台骨に当たり、私達は好条件な足場をIWAに提供するよう広範に努力すべきであり、IWAの使い方もさらに工夫すべきである。

(9) 水道事業体に対するIWAの事業展開と課題

過去20年間、世界中の水道界は大きく変化してきている。Paul Reiter専務理事からIWAも発足以来水道事業体の課題について情報交換する場としてCEOフォーラム、ワークショップ、資産管理に関する先端会議、5～6のスペシャリスト・グループを持っているが、さらに水道事業体に対するIWAの事業を発展させるためにMichael Rouse会長を座長とする「水道事業助言タスク・グループ（Adhoc Utility Advisory Task Group)」を発足させる。そしてメンバーは戦略評議会の水道事業体の委員とIWA水道事業体会員から選出すると言及した。続いて、Michael Rouse会長が理事会に将来に対して何かアイデアがあれば書面で通知してもらいたいと述べられた。Laszlo Somlyody教授は、水道事業体に対しては今後戦略評議会も依存しなければならない分野の一つであるので、戦略評議会でも水道事業体に対するIWAの事業展開について検討すべきであると付け加えた。

さらに、Helmut Kroiss教授は、今までIWSAは水道事業体志向が大変強かったのに対して、IAWQは学術志向が強かったとコメントされた。現在、IWAには組織間の違いを埋め合わせるための場がいくらでもあるが、それでも学術組織と水道事業体組織の間に緊密な関係を構築し続ける取り組みが必要である。これに対してMichael Rouse会長は、IWA内の別個の2組織という状態へ逆戻りする事態は避けなければならないが、統合を支援するために多方面で活躍した経験のある中立的立場の人達へ目を向ける必要があると答えられた。

(10) IWAウォーター賢人会の発足

Laszlo Somlyody教授は、IWAで活躍された丹保放送大学長を含めた数人の賢人会を発足させたいと提案され満場一致で承認された。

(11) ヤング・プロフェッショナル・プログラムに対する提案

Michael Rouse会長は、Tom Hadfield氏を理事会に招き、同氏に対して配布された提案資料に沿ってヤング・プロフェッショナル・プログラムの提案をするように依頼した。その内容は、35才未満の会員を対象に会議やワークショップなどを開催して将来のIWAを担う会員を発掘していく。その一貫として今回のマラケシュ世界会議の初日、9月19日（日）に半日のヤング・プロフェッショナル・ワークショップを開催することになっている。このワークショップは、提案資料に紹介されている4つのグループが数年先にどう変化していくか、またIWAが対象とするマーケットの規模にどのような効果を及ぼしてくるか検討することを目的の一つとして展開される。アメリカ合衆国の理事より、4つの異なったグループに参加してもらうことは重要で、それぞれのイベントには様々な関心と能力が終結することから、対象とするマーケットが大規模でかつ多様性に富むものになることは確実だとの発言があった。イスラエルの理事からもIWAロンドンオフィスと会長会議との調整が順調に進み、各国も協力するということになれば、このプログラムは非常に良い成果を上げることが出来るだろうと語り、さらに次のように発言された。どのようして若い人をこの組織に引きつけるか検討することも重要で、例えば親睦のためのイベントや特殊なスペシャリスト・ツアーが考えられる。ヤング・プロフェッショナルの興味が多くの場合、実社会で役立つ事柄に止まっていることから、高校生同士を結び付けるという方法に取り組み始めてもよいだろう。このように将来に目を向けていれば、IWAに優れた人材を集めることは可能です。アメリカ合衆国の理事からは、これは一つの事例であるがアメリカ水道協会ではヤング・プロフェッショナルに参加してもらうために博士号取得者に対して奨励策として無料会員資格を与えていると付け加えられた。Tom Hadfield氏は、会長会議にヤング・プロフェッショナルから役員一人を含めてもらうべきであると提案された。

以上のような環境でヤング・プロフェッショナル・プログラムにIWAから旅費、会議登録費、宿泊費の補助を受けるとともに、35歳未満の会員1,000人を2006年度まで確保していく。

(12) IWAの水道事業体に対するPR賞

今回の世界会議では①IWAグランド賞、②ヤング・プロフェッショナル賞、③サミュエル・H・ジェンキンス賞、④出版賞の他に水道事業体のPR賞も表彰することが満場一致で承認された。PR賞は水道施設、水道事業、リポート、学校への情報提供、水道料金請求書、顧客サービスの6分野とこの6分野の中でどれが一番のPRかの7部門で表彰される。

(13) IWA出版物

Michael Dunn氏がIWA出版に関わる戦略上の主要課題についてその概要を発表した。続いて、Mogens Henze出版局長からアカデミックな部門とプラクティカルな部門の両方を考えて出版してきているが、品質維持を第一の基準にする姿勢は堅持されている。さらに、学会以外の層へ販路を拡げようとした場合、言語が非常に重要な意味を持ち、IWA出版の「ウォーター21」を今後中国語、スペイン語で出版することが可能かどうか現在検討中であると報告があった。

(14) IWA会員

Michael Rouse会長からIWAに入会している会員総数等について報告があった。すなわち、今年の8月末の総数は5,544で、うち法人会員数は415で、長期的なマーケットプランで会員を増やしていきたいと報告があった。

(15) 世界会議

今回の2004年マラケシュ世界会議、2006年北京世界会議、2008年ウィーン世界会議の進捗状況について各会議会長から報告があった。2006年北京世界会議は、Qiu Baoxing副会長に代わって、Nie女史が世界会議進捗状況を発表した。開催場所は北京コングレス・センターで、開催期日は2006年10月10日から10月14日になることを確認した。

(16) その他

次回の理事会は2005年9月又は10月にメキシコで開催される。メキシコの理事は開催地についてPaul Reiter専務理事に伝えるが、2010年の世界会議・展示会の開催地を目指す可能性のある都市は除外するつもりである。

(17) 丹保放送大学長から得た新しい会議会長メンバー人事

会長　Prof. Laszlo Somlyody（ハンガリー）
前会長　Mr. Michael Rouse（英国）
シニア副会長
Dr. David Garman（オーストラリア）
ジュニア副会長
Prof. Zaini Ujang（マレーシア）
MPC議長
Prof. Helmut Kroiss（オーストリア）
財務官
Mr. Juan Ras（スペイン）(2008年9月まで)
SC議長　Prof. Eugene Cloete（南アフリカ）
出版委員会議長
Prof. Mogens Henze（デンマーク）
会長推薦　松井　三郎（日本）
会長推薦　Ms. Blanca Jimenez（メキシコ）
会長推薦　Dr. Harro Bode（ドイツ）
IWA専務理事　Mr. Paul Reiter
会議会長　Ms. Qiu Baoxing（中国）

5. CEOフォーラム（9月20日（月）の午前2時～午後6時及び9月21日（火）の午前9時～午後1時30分、アトラスホテル地下1階会議室）

このCEOフォーラムには東京都水道局の松井多摩水道改革推進本部調整部長そして日本水道協会の村元研修国際部長（初日のみ出席）と竹中国際課長が出席した。世界からはノルウェーのオスロ水道、スウェーデンのストックホルム水道、英国のテムズ・ウォーター、ユナイテッド・ユーティリティ、ベルギーのアントワープ水道、ドイツのベルリン水道、アクア・モンド、フランスのヴェオリア、スエズ、ポルトガルのリスボン水道、ザンビアのズル・ブロウ会社、南アフリカのTCTA、ランド・ウォーターなどから58名が出席した。なお、出席者には150ユーロ（約19,500円）の登録料を徴収した。

今回のCEOフォーラムは、まず地元ONEPのCEOであるAli Fassi Fihri氏とランド・ウォーターCEOであるSimo Lushaba氏によるCo-Chairsの開会の辞に引き続いてPaul Reiter専務理事が今回のCEOフォーラムの開催の目的を説明された後、各国／地域の水道事情について報告があった。各国の報告は西ヨーロッパ、中央・西ヨーロッパ、アフリカ、中国、日本で、日本は東京都水道局の松井多摩水道改革推進本部調整部長から報告があった。そしてコーヒー・ブレイクの後、今年5月に日本で開催したIWAワークショップと同じ報告があった。すなわち、オランダはPiet Jonkers氏、フランスはGerard Payen氏、オーストラリアはJohn Langford教授、英国はMichael RouseIWA会長、そして日本は東京都水道局の松井部長から各国の効率的な水道経営について報告があったが、質問もなく初日は終了した。

2日目は南アフリカのランド・ウォーターCEOであるSimo Luchaba氏の座長の元でWHO/UNICEFが提唱しているミレニアム開発、すなわち2015年までに低所得国の都市部に住む住民の88%まで安全な水を給水するプロジェクトのアフリカ諸国の取り組み状況についてアフリカ水と衛生プログラムの局長、Piers Cross氏の総括的な報告があって、ウォーター・ユーティリティ・パートナーシップ・アフリカの専務理事、Dennis Mwanza氏の事例報告に続いて、ウガンダ、南アフリカ、モロッコのそれぞれの事例報告があった。その後、コーヒー・ブレイクを挟んでアフリカでパブリック・プライベート・パートナーシップ（PPP）業務を行っているフランスのスエズ、ヴェオリア、SAURからの実績とランド・ウォーターの委託内容について報告があった。

最後にPaul Reiter専務理事から、今後のCEOフォーラムの予定について説明があり、最後にオブザーバーとして出席していたIWA新会長、ブタペスト工科大学のLaszlo Somlyody教授を紹介され終了した。

6. ASPIRE評議会

ASPIRE評議会が9月22日（水）午後12時30分

から開催された。Chan PUB 水道局長の司会・進行で、まず自己紹介して、丹保前会長から今回のIWA 役員会議でシニア副会長に David Garman 博士、ジュニア副会長に ZainiUjang 教授、そして会長推薦で京都大学の松井三郎大学院教授が会長会議メンバーに指名されたことを報告した。次いで、IWA の ASPIRE 定款、2005年シンガポール地域会議の進捗状況について審議されて事務局提案どおり承認された。2009年の開催都市については次回の評議会までに立候補都市を募集し、そして次回の評議会で選出することが確認された。

7. 視察旅行の概要

今回のマラケシュ世界会議で日本水道協会が編成した視察団は表-3の通りAとBの2コースに分かれて9月17日から10月1日まで「マラケシュ世界会議出席・展示会出席及び各都市の水道施設などの視察旅行」を実施した。Aコースは中村郁也札幌市水道局給水課長を団長に26名、Bコースは藤原正弘財団法人水道技術研究センター理事長を団長に16名で、これ以外に個人参加者としてIWA 役員会議に出席された丹保憲仁放送大学長、赤川正和日本水道協会専務理事など6名の参加があった。

さらに、日本水道協会が毎年実施している「国際交流基金によるグループ視察研修（ヨーロッパ）」については、研修プログラムの中にマラケシュ世界会議出席・展示会出席を組み込んだ。研修生団長に北千葉広域水道企業団の菅沼英政氏、副団長に旭川市水道局の原和祐氏を中心に福島市水道局の渡辺英春氏、愛知県企業庁の杉本靖文氏、貝塚市水道局の西坂和隆氏、岡山市水道局の國富直英氏、沖縄市水道局の東伸浩氏で、水道事業体の中堅の技術・事務職員であった。この研修については研修終了後、全研修生から「研修報告書」を作成・提出してもらい、それらを製本して日本水道協会の図書室に保管、自由に閲覧できるようにしている。

8. あとがき

この報告書には渡辺北海道大学大学院教授のプログラム委員会の内容については記述　すること

表-3 IWA マラケシュ世界会議・展示会出席及び水道施設視察団

Aコース	Bコース
9月18日 パリ市 9月19日～9月25日 マラケシュ市 9月26日～9月27日 カサブランカ市 9月28日　帰国	9月17日～9月24日 パリ市、カサブランカ市、マラケシュ市 9月25日 フェズ市 9月26日－9月30日 タンジール市、アルヘシラス市、コスタデル市、ミハス市、グラナダ市、コルドバ市、マドリード市、パリ市 10月1日　帰国
団　長　中村　郁也 （札幌市水道局給水課長） 副団長　山本志野歩 （前澤工業㈱水道営業部次長） 参加者数　26名	団　長　藤原　正弘 （財団法人水道技術センター理事長） 副団長　屋地　幹生 （㈱栗本鉄工所鉄管事業部営業部長兼企画部長） 参加者数　16名

ができなかった。しかしながら我が国としてIWA 会長会議のメンバーの一人に副会長選挙に立候補された京都大学の松井三郎大学院教授を丹保放送大学長の努力で実現することができた。新しく誕生した Laszlo Somlyody 会長のもとで様々な IWA 改革を成し遂げられることを期待して今回のマラケシュ海外出張報告としたい。

また、IWA 設立当初より、様々な形でご尽力いただいた丹保憲仁放送大学長に感謝申し上げるとともに、2005年7月に新たにスタートする IWA-ASPIRE についてご助言等いただければ幸いである。

（参考）

IWA 日本国内委員会

委員長　大垣眞一郎（東京大学大学院教授）
委　員　赤川　正和（日本水道協会専務理事）
委　員　渡辺　義公（北海道大学大学院教授）
委　員　松井　三郎（京都大学大学院教授）
委　員　岡田　光正（広島大学工学科長）
委　員　藤江　幸一（豊橋技術科学大学教授）
委　員　松井　庸司（東京都水道局多摩水道改革推進本部調整部長）
委　員　速水　義一（大阪市水道局技術開発担当部長）　（順不同）